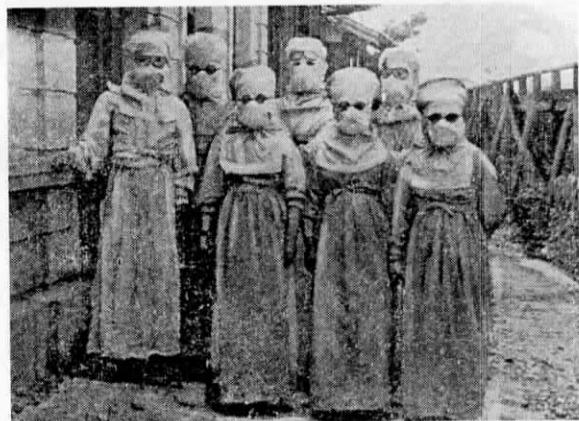


ペスト襲来

— 八九%の死亡率 —

大阪市立桃山病院の山上茂院長(五八)は、病院殉職者五十二人の「死の看護」のあとをまとめたいと思っている。そのなかでもとくに調べたいのは、医師では初、ペストではただ一人の犠牲者・石上順次郎の死の経過である。石上は明治三十九年十月十八日、ペスト大流行のさなかになくなっていくが、ペスト患者を実際に診察したことのない山上院長らにとって、勉強の材料にもなるからだ。それには、当時のカルテが必要。院長は開院以来の書類にうずもれた倉庫を捜しまわっている。

「えらいことでした。ペストで死んだ人は、からだがかげたようにまっ黒けになるので「黒死病」ともいいました」と当時を回想するのは西区新町南通二丁目に住んでいた永井四郎三郎さん(七四)(東淀川区元今里南通三の四〇、日舞粹光流宗家)。「死骸は「釈迦の寝像」、いまして悪い病気がかかったかわりに、お釈迦さんが迎えにきてくれたはったと、なぐさめたもんです。患者は政府(府庁)所在地の西区に多おましたが、表通りから一步はいたらガタッと落ちる生活環境が、ペストの温床でした」。

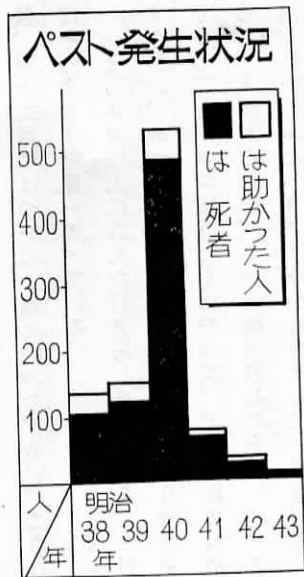


医師(後列)も看護婦も完全武装だった
(市立桃山病院蔵)

不吉の前ぶれは、明治三十七年の暮れにあらわれた。難波新川、桜川一帯(いまの浪速区)の路上で、ネズミがバタバタ死にはじめた。この年十月二十三日、英国船セルター号はシンガポール、香港経由でラングーン米と綿花を神戸港に陸揚げしたが、その米を十一月十日、伝馬船で新川の叶橋(いまの南海難波駅西北かど)まで運んだのが感染経路となったのだ。

ペストはすでに明治三十二、三年に大阪を襲っており、府下で百六十一人が発病、市内では百五十三人のうち百三十八人が死んでいる。菌はネズミのノミが媒介することも明治二十七年、北里柴三郎によって究明されていたから、府、市はあげてペストネズミ捜索にやっきとなった。

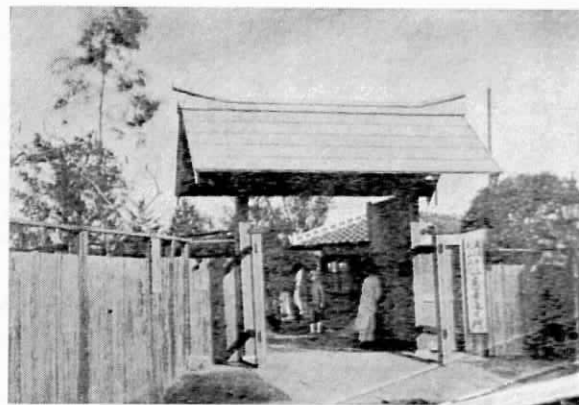
翌三十八年四月、南区難波西神田町(いまの浪速区)の古着屋のボロの中から、菌を持ったネズミをやっと発見したが、もう手遅れ。五月三日この古着屋の隣に住む女兒(三つ)が突然発熱、九日死亡した。ついで十月二十二日、安治川南通の女工(二八)が第二号になったところから堀江、桜川、日本橋、新町へとがぜん猛威をふるい出した。



警官の立合いで石灰のようなものをまき散らします。このときの騒ぎがよほどみんなの頭にこびりついてたんでしょう。のち、おしろいべったりこのおなこのことを「ペストの避病院行き」というたほどです」と永井さん。

入院しても、まだ治療のきめ手はなかった。馬の血でつくるペスト菌免疫血清はあったが、明治四十年大阪府がまとめた「大阪府第二回百斯篤（ペスト）流行誌」にも「著キ特効アリトモ認ムベカラザル如シ」とあるたよりなき。筆書きの当時のカルテを見ると「切開」「赤酒五〇〇」というのが、どの患者にも共通して出てくる。「りんば腺腫を切りとったのですよ衰弱して虚脱状態になると、ブドウ酒に強心剤をませて飲ませ元気づけたのでしょう」と山上院長は説明してくれた。

この間、日露戦争で夫を失った未亡人が幼い子を残して死んだり、一家が死に絶えて葬式を出せない家など、悲劇が大阪の町をおおった。防ぎ手は一つ。ネズミ退治で、病原菌のみなもとを断つ以外になかった。三十七年十一月二十五日から、大阪市は各派出所を窓口にしてネズミ一匹を二銭で買いあげたが、そこは抜け目のない大阪人。連日三千三百匹が持ち込まれる好成绩。感染地域が広がるのに比例して買いあげ値段はネズミ算式？に値上げされた。同年十二月には三銭、三十八年一月五銭、同二月七



府民から敬遠された通用門

いままでも元気だった人が、急に四十度近い高熱に見舞われ、悪寒、めまい、はき気になやむうち、首すじや足のつけ根のりんば腺がタルのようにはれあがる。そして三、四日でやってくる死。明治四十三年まで続く大流行の患者と死者は別表の通りだが、ノミが媒介する腺ペストのほか空気感染する肺ペストも加わったことで、被害は大きくなった。死亡率は実に八九割のすさまじさである。患者は桃山病院にかつぎ込まれ、家族と隣接民家の住民は北区西野田下島町（いまの福島区）の通称鼠島の消毒所へ隔離された。

桃山病院は明治十八、九年のコレラ大流行を機に設けられ、同二十年から悪疫流行のたびに臨時に開かれていたが、同二十九年から常時開設となっていた。しかし、なにしろこの死亡率。黒ペイに続くデッカイ通用門は「冥途の旅の一里塚」というわけで、府民からは敬遠された。医師や看護婦は黄金バットか月光仮面のような白いずきんに水中メガネ、つま先までおおう白衣に高ゲタ、ゴム手袋の完全武装でペストと取っ組んだ「患者の出た町は大騒動でした。かなり広い範囲までトタン板で交通をしゃ断し、大消毒です。二十人ぐらいの人夫の一団が、検疫員や

銭、同十二月にはついに十銭といったぐあい。こうなると一日平均五千四百匹が集まった。永井さんはそのようすを逐一知っている。

「それネコ以上にみんな目光らしりましたなあ。一日二十銭もありゃあ、大の男が一日食べた時分ですさかい、ボロおますがな。一日五匹もとれりゃスキャキですわ。倉庫の隣の家なんかは、ウケにいたりましてな。ネコ飼うのもはやって、どこの家でも最低二匹はおりました。ネコがネズミをくわえよると、人間がそれをパァッと横どりして交番へ走りまんねん。交番の前には二尺と一尺（三〇・三センチ）角ぐらいのふたつきブリキかんをすえて、巡査が朝から小ゼニ片手につききりですわ」。

そのスキをねらってか、西区内に凶悪事件がひん発、当時の新聞は「僅々二十日間ほどの間に、被害七件、区民は安き心もなく……」とネズミと「頭の黒いネズミ」による不安を報じた。

ペストが六年間にわたったのは、人災といえる面もあった。少し発生が減ると、ネズミの買い値を下げたり、消毒をきらって家財道具を他へ移す人が出たからだ。日露戦勝で一等国に仲間入りしたとははいえ、まだまだ低い民度が招いた恐怖だった。

伝次兄さん

—イトコの見た幸徳秋水—

豊中市本町五丁目一六〇に住む岡崎輝（てる）さん（七八）は、明治四十年十月二十七日から翌四十二年七月二十日までの九か月を、まるでそこだけスローモーション映画をみたように、脳裏にきざ



幸徳秋水と千代子夫人＝明治38年7月28日、出獄記念に撮影したもの（岡崎輝さん蔵）

み込んでいる。十八歳の彼女は、郷里・高知県幡多郡中村町（いまの同県中村市）で小学校の教員をしていたが、実の兄のように親しんでいたイトコの「伝次さん」夫妻が、東京から帰ってきた期間である。

輝さんがいまでも「にいさん」「伝次さん」と呼ぶこの人物は、当時、社会主義の最高の理論的指導者として、政府当局から蛇蝎のようにきらわれ、

つけねらわれていた幸徳秋水（本名・伝次郎、当時三十六歳）である。

輝さんはほとんど毎日、学校の帰りに、自宅とは目と鼻の先の秋水の家へ寄った。幸徳家は父祖伝来の薬種問屋「俵屋」のほか、いつのころからか造り酒屋も兼ねており、秋水夫妻は酒屋の奥座敷で静養していた。彼は明治三十八年二月、新聞紙条例違反で巣鴨監獄にぶちこまれたときから腸結核をわずらい、妻の千代子（当時三十二歳）は手の神経痛に悩まされていた。それだからこそ、十年ぶりに帰郷したわけだが……。

「よう 輝松きたか、なんていうのね。あたしゃあ、にいさんにまともに名前を呼んでもらったことがない。ときにゃ「やっこ」になり「輝公」ですよ。そのころからにいさんは、おながが冷えるものだから、タヌキの毛皮でふんどしをつくってはいいましたから「オニでもトラの皮なのに、タヌキの皮とは景気が悪いわね」とやり返してやったものよ」。

そんなやりとりをしていたかと思うと、秋水はクジラザシをにぎって、はだして庭へ飛び出す。子のない彼は「茶目」というチンの子をだいに育てていたが、これが親類で飼っているニワトリとけんかをはじめると、応援にかけつけるのだ。「伝次、オンシはなんつうことぞ」―母・多治にしかられて、彼は小柄なからだを一層小さくしながら、縁側に戻るのだった。「思想なんてものは、あたしゃあわからないよ。でもすっぱだかの伝次さんは、若い時分と変わらなかったねえ」と輝さん。どう変わっていないかは、東京で一つ屋根の下に暮らした輝さんの、これまた独壇場である。

秋水は生後一年にならぬ明治五年、父・嘉平次（四十歳）をなくしたため、母方の輝さんの家に親しんだ。母・多治と輝さんの父・小野道一（明治二十七年、四十五歳で死亡）が姉弟という間柄である。小野家は輝さんが生まれた翌明治二十三年夏、東京へ出たが、当時民権思想家・中江兆民の学歴として、ひと足早く上京していた秋水は、さっそく輝さんの家へころがり込んだ。以来、輝さん一家が高知へ帰る明治三十八年まで、十八連いの「兄妹」の交流は続く。

「抱かれごちがよかったことからおぼえてるけど、にいさんでいたずら坊でね。家でほたえまわる。ランプの紙のカサに得意の絵や漢詩を落書きして反射を悪くするやらで、あたしの母によくしかられよった。新聞記者になったとき（明治二十六年、自由新聞入社）多治おばさんがたくさん送って

きたキモノも、質流れにしたり、友だちへくれてやったりで、いつもくたびれたあわせ一枚きり。お千代ねえさんと結婚（明治三十二年）したての正月には、赤い手がらの大丸まげを結わせ、おひきずりをさせて、自分は羽二重の紋つきでお殿様のようにおさまりかえているかと思うと、二年目はねえさんのタンスをカラにしないと年を越せない。あとのこと考えない人でしたよ。」

「勉強はしてましたね。偶然に夜中の勉強ぶりを見てから、子どもごころに見直したほどだから。食べものにもグチをいわず、つつけものにしようゆを余るほどかけるやつはバカじゃ。」「ご飯は残すもんじゃない」とあたしらのふやけたお茶づけをきれいに片づけてくれました。あたしの父が死んだとき、浄瑠璃を語ったり、歌をうたったり、一生けんめいなくさめてくれたときは、母もよろこんでました。気のやさしい人でしたよ。」

高知・中村での九か月の間も、床を並べた千代子の痛む手を、秋水がいつまでもなでさすっている情景を、輝さんはこの上なく美しいものとして見ている。下痢に悩みながら、分厚い洋書（クロポトキン著「パンの略取」）の翻訳に取り組んでいるのも、おどろきだった。しかし、自分と妻の容体がどんなに悪くても、恩師・中江兆民の命日と先祖の法事は、きっちり勤めた。「にいさんを日露戦争のアプレのようにいう人もあるが、そんなはねっ返りなところはひとつもなかった」という。そんな、古風ともいえる秋水が、無政府主義に打ち込んだ発端を、輝さんは肉親としてこう見る。

武家出身の秋水の母は、生来ひよわだったので、労働の激しい田舎士族の嫁には向かんと、維新前、町家の幸徳家へといだ。しかし、ことごと二本差しの親類筋から受ける階級的差別に泣く。

そこで生れた秋水も「町の子」の屈辱感から、平等をとく自由民権運動——社会主義思想へ走った、と。輝さんは「平民社、平民新聞とか、伝次さんが「平民」の二文字を一生追い続けるそもそもは、境遇プラスすぐれた頭脳から生まれたものだったのよ」とつけ加えた。

これも学校帰りのある日、輝さんは秋水のまくらもとで、思い切っていたことがある。「社会主義なんておやめなさいよ。多治おばさんを心配させるし、ろう屋にはいるし。ちっとも良くないわ」。秋水はマユも動かさずに答えた。「お前なんかにわかるか。にいさんの考えていることは二百年さきに世界の人がわかってくれる」。

果たして、明治四十一年六月の末、秋水は「東京へ行かねばならん」といい出した。「多治おばももう年じやから」と親類一同は説得にかかったが、彼は「過激なことはせんから」とガンとして聞き人れない。翌七月二十日、秋水は一同に見送られて一人で出発した。輝さんらは、四万十（しまんと）川の渡しを渡ったところで、宿毛港へ向かう秋水と別れをつげた。

遠ざかって行く秋水は、夏の風にざわめく竹ヤブのそばで、こちらをふり返り、ニコニコ笑った。これが「にいさん」の見おさめになるなど、輝さんは考えもしなかった。

恨めしき都

―弾圧迫る―

被告席には大杉栄、荒畑寒村、堺利彦、山川均ら名だたる社会主義者十四人がズラリとならび開廷前から検事席をにらみすえていた。明治四十一年八月十五日前九時まえ。東京麹町区西日比谷（いまの千代田区霞ヶ関）の東京地方裁判所での赤旗事件第一回公判。そのけわしい、張りつめた空気は、一人の小柄な男が青白い顔を法廷のとびらからヒョイとのぞかせた瞬間に破れた。被告席には声のないどよめきがあがり、被告たちはうってかわった満面のえみで、男を迎えた。病氣療養中の高知県幡多郡中府から傍聴にかけつけた幸徳秋水だった。

赤旗事件というのは、このとし六月二十二日、筆禍事件の刑期を終えた山口義三の出獄記念会が東京・神田の錦輝館で開かれたとき・大杉、荒畑らが「無政府共産」の二本の赤旗をふりまわし、警官隊と奪い合った事件。その中身は当時の社会主義者の動きを象徴していた。わが国の社会主義運動は、日露戦争に対する秋水、堺ら平民社の「非戦論」で注目を浴びたが、その訴えがさしてききめがないという行き詰まりのなかで、秋水は明治三十八年十一月から翌三十九年六月まで渡米した。彼は

そこで、無政府主義の思想にとらえられる。彼の帰国第一声は、普通選挙制の実現をめざしたこれまでの戦術を否定し、ゼネストによる革命を強調するものだった。リーダー・秋水の方向転換は大きな波紋を呼び、日本社会党(明治三十九年二月結成)の運動方針に議会政策か、直接行動かに割れ、激しく対立していた。錦輝会の赤旗も、直接行動が議会議場政策派にしかけた意識的なデモだったのである。

この事件は八月二十九日、十二人に最高二年半、最低六月の重禁固をいい渡して幕となったが、赤旗を奪い合っただけで、この重刑が課せられたのは当時の政府当局の姿勢を示すものだ。

当時、政府は内、外にいくつもの懸案をかかえていた。国内では社会主義者の呼びかけにこたえる



秋水と菅野スガ(明治42年9月22日に撮影したもので、秋水の親せき、同志を怒らせたいわくつきの写真)

ように、足尾銅山など鉱山労働者の争議が各地で暴動に発展、そのつど軍隊が鎮圧に出動せねばならなかった。外、韓国を植民地化しようとするネライは「義兵運動」といわれる韓国軍隊の激しい抵抗をまき起こしていたし、満州市場独占の計画は、綿布輸出をしめ出されたアメリカの怒りを買い、日米戦争が起るのではないか、とまでうわさされた。日本

は同盟、協商でつながるイギリス、フランス、ロシアとの関係を深め、アジアの民族主義運動を押えつづける側に回っていた。

そんななかで、国家権力そのものを否定し、政府の政策をことごとく批判する無政府主義者の存在は、政府当局には許せない。赤旗事件が起きると、元老・山県有朋は「社会主義者に対する取り締まりが手ぬるい」と西園寺内閣を引きずりおろし、腹心の桂太郎に政権をとらせ、なみなみならぬ弾圧体制をしいた。

赤旗事件判決の不当を怒る秋水は「友病みぬ 餓(う)えぬ 悩みぬ 捕われぬ 寂しき都 恨めしき都」と社会主義の陣営の壊滅状態を嘆いたが、彼は個人的にもわずらわしい問題をかかえていた。妻・千代子の姉は検事にとついでおり、秋水が過激な言動をとることを極度にきらった。秋水のあとを追って、明治四十二年一月上京した千代子は、姉が秋水と正面衝突しないようとりもったが「相当の反抗」を考えていた秋水は困った。同二月、千代子の神経痛が再発したのを機会に秋水は離婚届けにムリヤリ印を押させ、姉のところへ去らせた。

ここまでなら、迫る危険から妻を避難させた、といえる。しかし、親せき、同志を怒らせたのは、秋水が三月にはいってすぐ、赤旗事件で無罪になった女闘士・菅野スガ(当時二十七歳)と菓鴨で同棲しはじめたことだ。スガは獄中にあった荒畑寒村との内縁関係を、清算しないままだった。

「菅野さんは男なしではすまない人だから、お膳をすえたのよ。亭主ってものがありながら、これもひどいが、つまみ食いした伝次さんはもうひとつ悪い。あたしゃあにいさんは大すぎだが、女性問題

に関しては、いけなかったね」岡崎輝さんは「いけません」を連発しながら話してくれた。

千代子がすでに、二度目の夫人だった。最初の結婚は明治二十九年、彼が二十五歳のとき。友人にすすめられると、母・多治にも相談しないで、旧居留米藩士の娘・朝子(当時十七歳)をあっさりもらった。ところが、かわいばかりでものたりない。三か月後「里帰りしてこい」ときげんよく上野駅まで送っておいて、こんども親兄弟に無断で、離縁状を郵送した。「多治おばさんに、しかられた、しかられた。当座は伝次さんも、小さくなって謹慎しましたよ」と輝さん。明治三十二年に結婚した千代子は、幕末の足利尊氏木像事件で知られる勤王の志士・師岡正胤の娘。「革命家の娘が革命家と結ばれた」と同志の間で評判になったが、このときにもこんな珍談がある。千代子の額にはちよっとしたアザがあったが、見合いのとき秋水は気づかなかった。おねや入りしてから見つけましてね。飛び出してきて「またしくじった。これから吉原へ行こう」といい出した。さあ、周囲があわてて、押し戻すのにたいへんでしたよ」。

輝さんは、秋水がスガと同棲直後、高知・中村から所用で上京したが、スガと顔をあわせるのがいやさに、秋水をたずねなかった。そのかわり帰途、離婚後の千代子がいる大阪に立ち寄った。千代子は太融寺の北門近く、いまの扇町線あたりにあった一軒家のタバコ屋の二階を借りて、さびしい療養生活を送っていた。

聞くと、秋水から月々十二円ずつ、キチンと送ってくれるという。輝さんは意外だった。と同時に、秋水とスガとの間に、色恋以外のなにか重大な関係があることを、若い娘の第六感で感じとって

大逆の徒

—ナゾのスピード裁判—

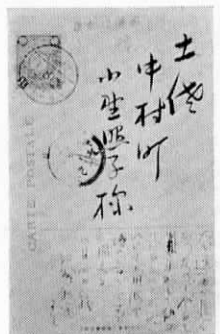
明治四十三年は、憂うつな年であった。四月十五日には瀬戸内海の新湊沖で、第六号潜水艇の遭難事件が突発、佐久間勉艇長の遺書が世人に痛烈な衝撃をあたえた。これと前後して大きわぎとなったのが、ハレーすい星の接近による地球滅亡論。結局はなにごともなく、人びとがほっとしたのもつかの間、またまた国民の心をおびやかす現実的な事件が起きた。

「社会主義若くは無政府主義者と称せられ居る幸徳伝次郎、菅野スガ、宮下太吉、新村忠雄、古川力作等は共謀し、某所に於て爆発物を製造して或る恐る可き将(は)た憎む可き過激なる行動に出でんとして陰かに計画しつつありしが、其筋の知る処となり全部検挙せられ、目下東京地方裁判所にて予審中なり。実に我国未曾有の大事件にして、新聞紙に掲載を差止められ居るを以て犯罪の内容を報ず自由を得ず」(明治四十三年六月四日付け読売新聞)。

明治天皇の爆殺をはかったとして、幸徳秋水ら二十四人に死刑がいわたされ、うち十二人が処刑

されたいわゆる「大逆事件」である。「なにがなんだかわからないけれど、たいへんなことらしいとおどろきました」——高知・中村で新聞を見た秋水のイトコ・岡崎輝さんの感じは、国民おしなべての受けとり方だった。その「わからなき」がいまだに解決されていないことは、歴史学上「社会主義弾圧の暗黒裁判」という見方定説となっていることや、結局棄却された(昭和四十二年七月五日決定)とはいえ、最高裁への再審請求特別抗告が、最近まで続けられていたことに示されている。

残された記録から、経過をたどろう。甲府生まれの職工・宮下太吉(処刑時三十五歳)は明治四十年一月、秋水、堺利彦らの平民社が出していた「日刊平民新聞」を続いで社会主義に傾いていたが、翌四十二年十一月三日、箱根の革命僧・内山愚童(処刑時三十六歳)から「入獄記念・無政府共産」という豆本を受けとりその激しい天皇制批判に共鳴した。「いまの政府の親玉たる天子といふのは、諸君が小学校教師などからだまされて居るやうな神の子でもなんでもないのである」といった調子のものであった。



宮下がこの月十日、天皇が関西巡幸のため東海道線大府駅を通過したとき、奉迎の群衆にこの趣旨を話したが、だれも耳を傾けない。彼は「まず爆裂弾をつくって天子に投げつけ、天子も我々と同じく血の流る人間であるということを示し、国民の迷信を破らねばならぬ」(第一回予審調書)と天皇暗殺を決心した。



輝さんあてのはがきの裏面

宮下は明治四十二年二月、平民新聞の論説などを通し敬服していた秋水をたずね、計画を話したが、秋水は「今後そのような必要であらう。またそのような人も出るだろうと、あいまいな返事」（同調書）をしただけで、宮下を失望させた。彼は「幸徳は筆の人で、実行の人でないと思ひ」（宮下の第四回予審調書）、平民社で見つけた新しい同志・新村忠雄（処刑時二十三歳）を助手格に爆弾のつくり方の研究をはじめた。

百科辞典で火薬の材料を調べるというイロハからはじめて、製法がほぼつかめたこのとし六月五日、宮下はふたたび秋水をたずね、あらためて決意を打ち明けた。このとき秋水は管野スガと同棲していたが、のち潮恒太郎判事の第三回予審に「そのときは同意しました」といっている。積極的に計画に賛成したのは、スガだった。彼女は赤旗事件で無罪にはなったがリンチに近い調べ方をされ、仇を討ちたいと考えていた。

宮下はツテをたよって火薬の材料を集め、爆弾の製造に全力を注いだ。そして明治四十二年十一月三日、日本アルプスの明科（あかしな）の山中で、小形爆弾を切り通しのがけに投げつけ、その

実験に成功した。

秋水が大逆計画から後退しはじめたのは、このころからである。第三回予審で「その計画を見合わせて、著述に従事したいと考えておりました」といひ、その原因として「人は何事にも時に冷熱があるもの」といっている。スガも「本年（四十三年）二月ごろから、幸徳はそのようなことは到底成功するものではないと申しておりました」（第五回予審調書）と裏づけている。

当局は明治四十三年五月二十五日から、宮下、新村、管野、幸徳ら七人を捕えた。冒頭の新聞記事を発表した東京地裁の小林検事正は「関係者は前記七名のみ」と確信的に発表した。九月にかけ逮捕、起訴された関係者はさらに十九人と異常な広がりを見せた。

秋水は中村から赤旗事件公判傍聴にかけつける（明治四十一年七月）途中、和歌山県新宮に同志・大石誠之助（処刑時四十四歳）をたずね、いっしょに熊野川へ舟遊びに出かけているが、舟の中で「政府が暴力をもって迫害すれば、暴力で対抗せねば」という考えから「大石に爆裂弾の製法をたずねた」（秋水の第十三回予審調書）ことが「大逆のための爆弾製造の密議」と断じられるというふうな、二十六人全員が共同謀議を問われた。しかし、幸徳に情状酌量の余地があるほか、追加逮捕の十九人については、この計画に協力したことの証拠はなく、社会主義者弾圧を使命とする桂内閣の陰謀の色が濃い。

「多治おばさんはすっかりしよすいし、見るも痛々しいほどでした。詩でも考えたり、本でも読んでいなさい」というたよりは、わたしが代筆したのです。そんななかでただひとつの救いは、に

いさんが離縁したお千代ねえさんを呼び寄せたことでした」と輝さん。

非公開の第一回公判はこのとし十二月十日開かれ、弁護士側の申請した証人を一人も認めず超スピードで行なわれた。二十四人に死刑の判決が下ったのはなんと翌四十四年の一月十八日というすばやさ。翌日「天皇の思召によって」半分の十二人が無期懲役に減刑されたのも、演出くさい。

輝さんは「千代をいつまでも頼む」という一月二十三日付けの秋水のたよりを受けとったが、二十四日、三十九歳を一期に刑場の露と消えたあとだった。

迫害のかげで

―秋水に殉じた千代子―

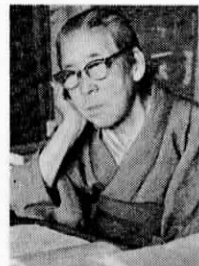
妻・千代子（当時三十五歳）は、やさしい、度量の広い人だった。まだ予審が行なわれていた明治四十三年十一月、秋水に頼まれると、大阪市北区太融寺の借家住まいを片づけ上京、かゆいところへ手がとどくように秋水の世話をした。秋水に強いられて離婚届けに印はついたが、気持ちの上では妻であり夫だった。そればかりではない。「すが子（管野）の総髪銀杏返しに紋羽二重薄紫色の羽織は例に依って満廷の視線を惹きたり」（明治四十四年一月十九日判決当日の大阪朝日新聞）の評判にな

ったむらさきの羽織は、実は千代子が贈ったものだ。妻の座を奪った相手なのに……。

秋水の妻であるばかりか、「女大逆犯」への彼女のこんな態度は、当局にはフラチ千万なものとうつたようだ。秋水の死後官憲のじゃまだで、職もなければ家もない窮地に追いやられた。岡崎輝さんは「夫婦の情愛もわからないヤツでね。ずいぶんおとな気のない仕打ちでしたよ」と身をふるわせる。借家を見つけて引越すと「あれは極悪犯の身内だから貸すな」。それで次を見つけると、また横ヤリがはいる。ひどい時には、一日に三回引越したことさえあるという。

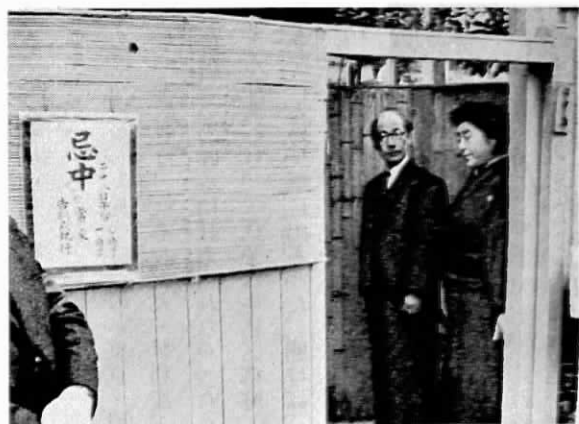
あげくにやっと見つけたのが東京・目黒の奥の百姓家の一室。ここから、ミシンの出張教授に出かけた。生活費は、秋水の友人・堺利彦、小泉三申や、検事にとついでいる千代子の姉からおくられていたが、その好意に甘えきれなかったからだ。

そんなある日、千代子は牛込区柳町（いまは新宿区）の訪問先で、若い夫婦に養われているさびしそうな一人の少年に出あった。聞けば、大阪からあずけられてきているという。大阪は千代子にとつても秋水との離婚の悲しみをいやした忘れられない土地。なん度かの訪問のたびに、彼女はなにくれ



けふに筆を出す
輝さん
の伝記
秋水の自伝
をめぐめる

と少年のめんどうをみ、なぐさめてやった。少年は千代子の家へも遊びにくるほどなつき、のち大正五年四月、十九歳でついに養子となる。千代子がさる三十六年、八十五歳でなくなるまで、血の通った母子以上のうるわしい間柄を続けた東京都杉並区高円寺北三丁目三一の五、元日本電建本社出版部長・田中茂さん（七〇）



千代子を最後まで見とった田中茂さん夫妻（千代子の葬儀の日）

である。

「わたくしの父は大阪合同紡績（明治三十五年創立、昭和六年東洋紡績に合併）の住吉工場長をしておりましたが実母はわたくしが幼いころになくなりましてので、東京の知人宅にあずけられました。母の愛に飢えていたので、母（千代子のこと以下同じ）の親切が身にしました。大きくなってから養子にしてみましたのは、このときの気持ちをなんとかご恩返ししたいと思ったからです」。

しかし、そのことで田中さんもまた、当局の要注意人物のリストにのせられた。「母といっしょになってから青山に住みましたが、毎日尾行が二人、家の周囲をうろついていました。大正十年の七月のことです。

朝、なんの気なしに神田の古本屋街に出かけると、私服刑事が「チョット、コイ」です。錦町警察へ連れて行かれ「しばらくここにおれ」が、とうとう夕方までです。なんの調べもなく、帰ってよいというので、キツネにつままれたような気持ちで帰りました。夕刊を見ると、東京帝国大学の卒業式に大正天皇が行幸された当日だったのです。ひどいものでした」。

「それでも母は仏さんみたいな人でしたから、尾行の刑事でも人間的にまともな人は、みんな敬服していましたよ。きびしい尾行は大正十二年の関東大震災ごろまで続きました。このころになると、労働運動や思想活動も活発になり、いつまでも明治の事件にかかわっておれなくなったからでしょう」。

千代子がなくなるすこし前、輝さんは「にいさんのおかげで一生苦労したわね」といったことがある。千代子はニコニコ笑うだけで答えない。「ねえさんにはいさんが好きだったから、そんなにつくはなかったのね」というと、千代子は「そう」といつてから、ドギマギした表情をみせ、周囲にいた人たちからひやかされた。「好き」ともいわずに、一生を夫に殉じた明治の女のひたむきさ。現代女性には、もはや求むべきもない真情だろう。

大逆事件から五十五年。輝さんは秋水の素顔や、事件の外伝を目で確かめた、肉親ただ一人の生き残りである。「戦後、とくに、にいさんは大うつしになって、いろいろと書かれもし、語られもしてきたが、こまかいニュアンスになると、どれも違うんだねえ」という。取材で会ってみておどろいたことだが、記憶力がずばぬけてよい。生後一年二か月の明治二十三年夏、輝さん一家は高知・中村から上京したが、長旅ののちはじめて寝かされた深川の家の天井の色が、白っぽかったこと。二歳とき秋水にだかれて神楽坂で見た兵隊の帽子が赤く（ハチ巻きの部分）、おもしろかったこと。八幡さんで秋水がサルに手をひっかかれ、血が赤くにじんだことまでおぼえている。

それらの記憶を総動員して、輝さんはさる二十五年ごろから、独自の「幸徳秋水伝」を書きはじめ

た。第一稿千二百枚（四百字詰め）は、二十七年末にできあがったが「壁にかかげたにいさんの肖像が『そんなへたな文章があるか』とグズグズいいよってかなわん」ので、二度三度と書き直し、現在やっと第三稿ができあがりかかっている。

「にいさんのしたことが良いか、悪いかは知りませんよ。あたしにゃあ、思想なんてものはわからない。けど人間・幸徳伝次郎ならまかせてほしいね」——明治百年に花を添えたいと、老女はきょうも筆をとりつづける。

徳風学校

—あいらん学園の先輩—

西成市民館（西成区甲岸町）の門をはいると、右側に黒ずんだ石碑が建っている。高さ一・二メートル、横〇・七メートルあるが、出入りする市民は気にもとめない。顔を近づけると「私立徳風校」「天野時三郎」「久保田権四郎」の字が目飛び込んでくる。明治四十四年夏、この付近のまずしい子どもたちのために開かれた学校と、その設立に情熱をかたむけた大阪人の名だ。社会事業のさきがけをなすこの開校は、こんな「事件」が動機になった。

「巡査が通りよる、通りよる」。こどもたちの声で、振り返った難波警察署（浪速署の前身）の署長・天野時三郎は目をむいた。六、七人の子どもたちが石を持って追ってくるのだ。はだしの者がいれば、赤ん坊を背負ったものもある。石を投げつけてくる子どもたちに彼は怒りで大声を上げそうになった。明治四十三年九月南区木津の貧民街のできごと。就任第一日目の天野が管内を巡察中のことだ。

署に帰った彼は考え込んだ。怒りはおさまり、子どもたちへの同情が胸の中をウズ巻いていた。

「人並みにそだっている子どもたちは、この時間には学校で授業を受けている。教育を受けていれば、投石するはずがない——」彼はこの子らのために、教育施設を真剣に考えはじめた。

当時、不就学児童の対策は社会問題になっていた。明治十九年の小学校令で、尋常小学四年課程は義務づけられ、就学率は男六〇%、女三〇%と低かったが、日露戦争後には男女とも九〇%を越え、四十年、義務教育は六年に延長された。残る問題は、あとの一〇%の児童を学校に行かせるだけ。辺地と貧民街の児童が対象だった。

「わたしの調査によると、明治四十二年には、戸籍面では大阪市に三千五百四十五人の不就学児童がいました」。貧困児童教育の実態を研究している大阪社会事業短大、碓井降次教授（五八）が話してくれた。「なかでも南区では千二百十六人もおり、うち千八百八人までが貧しさが原因でした。しかし、戸籍もなければ住民票にもものっていない「やみ」の存在を考えると、実数はもっと多いでしょうね」

天野はこうした貧困児童の実態をしっかりとつかんだ。教育に対する理解は、人一倍深かったのだ。故郷の淡路島にいた子どもたちのころ、小学校は彼の家で開校した。小学校を卒業後、すぐ漢学者に弟子入りし、大阪に出て警官になっても、夜は関西法律学校（関西大学の前身）で学んだ。そして、はじめて署長のイスにすわったのが難波署だ。いまの浪速区をふくむ広い範囲を管轄し、貧民調査を行なっている積極的な警察だった。

いつしか彼の頭のなかに青写真ができていた。授業料も学用品も無料、散髪もしてやり、ふるにも入れてやる——。計画を聞くと町の銭湯や散髪屋が無料奉仕を買って出た。医者がかつけける。

洋服屋までが制服を作ってやろうといひ出すほど。ところが、かんじんの設立資金がない。このとき彼の支持者が現われた。久保田鉄工の創設者久保田権四郎だ。

「天野さんが頼みにこられたとき、父は一も二もなく応じました」。こう話すのは権四郎の三男で、岡田鉄工の会長・久保田信博さん（五〇）（阿倍野区帝塚山西五の三四）。「小さいときに苦労したので、人づくりに熱心でした。酒はよく飲みましたが、家に酔っぱらって帰ったことはなかったです。月に一回、決まって生駒山か信貴山に歩いて登られました」。コメづくりから国づくりまで「コマールシャルではないが、久保田の人づくりは、自分のこどもだけが相手ではなかった。彼は天野に南区（いまの浪速区）南高岸町の工場を校舎として提供した。そのうえ、毎月三十五円（いまの約四万九千円）の援助さえ申し出た。校名は天野が論語から引用して「徳風学校」と命名した。

こうして、明治四十四年七月五日、いまの「あいりん学園」の先輩ともいうべき「徳風学校」はスタートした。十歳前後の児童が八十人、男児はそろいの筒ソデに青青とした丸刈り、女児の頭にはリボンが結んである。みんな有志の寄付だ。きのうまでとは違って変わった愛くるしさに、式後、親たちが見まわちがえ、イヌまでがほえ立てるしまつ。校長には木津第二高等小学校長が兼務し、教員には中学校卒業の警官、高等女学校出身の警官の妻まで加わっている。授業は夜間なので昼夜兼行の勤務だった。

児童のほとんどは昼間働いており、登校する前、タダのふろにはいる。まともなふろにはいったことのない者ばかりなので、湯ぶねのなかで大あばれ。とうとう一か月でふろ屋の主人はネを上げた。



散髪もたいへんだった。『百日かづら』のような頭を刈るので、バリカンがいっぺんにつぶれてしまう。おまけに大半はトラコーマにかかっていた。こんな子どもたちが集まるので、教室は大混乱。血を流すほどのケンカも、しょっちゅうだった。

徳風学校は付属施設として保育所と診療所を作った。一か月前、製革業者・新田長次郎が資金を出して「有隣学校」が木津北島町に作られていたが、徳風学校の持つ総合施設にはおよばなかった。保育所には六歳以下の幼児を無料あずかり、保母がゆりかごに入れてつきっきりで世話した。診療所ももちろん無料。はじめて差しのべられるあたたかい手に、患者たちはどっと押しかけた。

天野、久保田の働きが動機となって各警察署も社会福祉に力を入れる。曾根崎署は保育所、九条署は盲人教育、南署は夜学校などだが、警察が中心になって進めた社会事業は全国でもめずらしい。

一年後、近くの広田町にうつった徳風学校は、大正にはいったて昼間部を設立、同十一年には大阪市に移管され、終戦までつづいた。この間、天野は大正五年市社会部長（いまの民生局）に就任、米騒動（大正八年）のさい、簡易食堂などをつくって貧民救済につくし、徳風学校に見せた社会事業の幅をいちだんとひろげる。

塔と通天閣をむすぶ四人乗りのロープウェイはスリル満点。演技館、音楽堂、モンキー・ホールなどもあり「綾糸の滝」が五色のネオンに映える夜景は格別だった。夏場は「完全冷房」の水山館が人気を呼んだが、なんのことはない、氷を積み上げてあるだけで「これでゼニになったんやから世話はおません。活動写真館なんかでも、見てくれだけりっぱな「ハリボテ」でしたが、あの時分はすべてがめずらしく、年じゅうにぎわったもんです」と髭さん。

原駒子、森静子というと、オールドフアンにはなつかしい往年の大スターだが、二人とも大正のはじめ、いまの日劇会館のところにあった日本クラブ（その前は浪花倶楽部）の舞台に立ち、名子役として人気を集めていた。同じころルナパークの演技館で錦城という名で少女ピワ劇に出ていた美少女が、田中絹代だ。原さんはいま曾根崎新地二の一でバー「クレイン」を経営しているが、病氣入院中で、お弟子の吉田礼子さん（四七）（「クレイン」の二階で割ほう「みつる」経営）を通じて思い出をこう語っている。

「父（原天波）が活動写真の弁士だった関係で、九つぐらいのとき横浜から移ってきました。映画入りするまで四、五年間、大川駒子の芸名で新派劇やチャンバラに出ていましたが、この間ずーっと新世界に住んでいたのです、たいへんなつかしいところですよ」。

ところで、ルナパークだが、十年一日のごとく同じものを見せていては、あきらめるのが当然。大正十二年には解体、興行街に生まれ変わった。しかしこの間、新世界周辺にはつぎつぎ新しい名物がお目見えしていた。大正二年、いまの温劇のところにラジウム温泉ができたのをはじめ、市立動物園

新・新世界

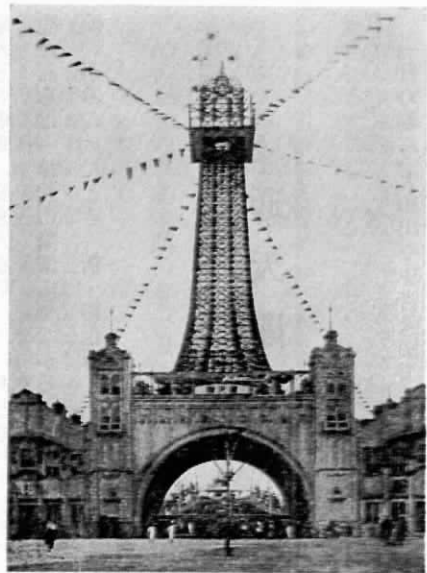
（同四年）、飛田遊廓（同七年）、国技館（同八年）などが開かれている。この芸者は、モダンさと花代の安さから「大正芸者」ともてはやされ、お好み焼き屋ブームも大正末、新世界からはじまった。花菱アチャコ、ダイヤモンド、ラケットらコメディアンが、ここで育ち名声をあげていることも、新世界が「庶民の町」であるあかしだ。

ところが、その新世界も、戦災を境に、ガラリとおもむきを変えた。「再建された通天閣も動物園も、えらいもうけてるようだけれど、そのお客は新世界を素通りやおませんか。魅力がのうなった証拠ですわ」と髭さん。地元の人たちは、いま夢を持っている。昭和四十一年かぎりで廢止になった市電天王寺車庫（浪速区霞町二）のあと地利用がそれ。市は、ゲタばきの高層団地を建てる構想だが、髭さんらは「地元の繁栄につながるようわれわれの要望を十分に反映させてほしい」と談判中。その願いがみのったとき「新・新世界」が生まれるかもしれない。

通天閣物語

— 郷愁の塔 —

「日の暮れ、大和川や住吉公園で遊びほうけて松虫あたりまで帰ってくると、通天閣と五重塔のてっ



開業当時の初代・通天閣（八尾市西山本町4の7の25、関寅太郎さん所蔵）

べんが見え出してくる。「ああ、家へ帰ってきた」という安堵感で、足が軽うなっ
たもんです」。

阿倍野区旭町二の九七に住む作家・上井楠（じょうい・さかき）さん（五九）は、こういって遠い目をした。先祖代々、いまの八尾市恩知で庄屋だったが、父親の代になって大阪市に別家、四天王寺南門のまん前で生まれ育った、きつすいのなにわっ子。「あの時分は、ほかに高い

建て物はなく、夕日をあびて金色にかがやく五重塔の九輪と通天閣のイルミネーションの美しさは、この年になっても、あざやかに目に浮かびます」。

通天閣が生まれたのは明治四十五年七月三日。新世界を開発した大阪土地建物会社の直営事業として、大林組が工事を請け負い、九万七千円を投じて建設した。パリのエッフェル塔（一八八九年建設、高さ三百十二メートル）がモデルで、七十五メートル、日本一の高さを誇った。「天に通ずる」意味をこめて命名されたが、大土地社長・土居通夫の名前にちなんだとの説もある。

工事中、全作業員に生命保険がかけられたが、事故はたった一回、まん中あたりからボルトが落ちて作業員が頭に軽傷を負っただけ。そういえば、いまの二代目・通天閣の工事でも、六十メートルの高さの足場から、やはりボルトが落下して通行人が頭にケガをしたのが、ただ一度の事故で、なにかの因縁を感じさせる。

土台はアーチ型の鉄筋づくりで、天井には美しい天女の舞い姿が描かれ、エレベーターで展望台まで上がると、淡路島から六甲、生駒が一望のもと。そのエレベーターは金網張りの幼稚なシロモノだったが、当時は東京・汐留駅と大阪の専売局に、貨物用がひとつずつあるだけで、人を運ぶのは初めてだった。入場料は大人十銭、子ども五銭。大工の日当が八十銭ぐらいだったからペラボウな値段だったが、連日、押すな押すのにぎわい。

展望台には、大土地直営の売店があり、ビール、ラムネなどを置いていたが、吹田市高野台一の五に住む柴田千代さん（七二）は、その売り子だった。「通天閣ができて間なしに、従業員を募集していると聞いて応募したんです。なにしろ「日本一の塔」なので、さぞかしハイカラな仕事がさせてもらえるとアテにしていたんですが、売店係りに回され、ガッカリしました」と柴田さん。

しかし、やってみると、わるくない仕事だった。「売り子は三人いて、濃紺の制服に白いエプロンがけでした。展望台のランカンのそばに売り場がありましたが、まいにち「下界」を見下ろして暮らすのは、なかなか気持ちのいいもんでした。ただ、困ったことに、雨ざらしなので、天気の良い日は店が出せませんでした。そんなときは、ロープウェイに乗ってルナパークへ遊びに行ったり、活動写真やお芝居を見に行ったもんです。ですから、雨降りの日がたのしみで、それでも日給二十銭もらえたのです

からのんびりした時代でした。もっとも、わたしは一年ほどでお勤めをよしましたが……」

高いは通天閣

通天閣はこわい

こわいはゆうれい……

大正のいつごろからか、こんなシリ取り歌がはやり「わたしらもよく歌ったものです」と上井さん。大正五年十月九日夕、山口県出身の二十四歳のノイローゼ店員が展望台のランカンを、アツという間に乗り越えて「通天」ならぬ「昇天」した。これが通天閣での飛び降り自殺第一号で以後、展望台に金網がめぐらされる。有名な「ライオン歯磨」の電飾広告がとりつけられたのは大正九年七月だが、これも全国の電飾広告のハシリ。なにかにつけて通天閣は、話題のみなものになっていった。

だが戦時色が深まるにつれて経営が苦しくなり、塔脚の両わきにあった芦辺劇場と花月で「ささえ」ていたが、とうとう昭和十三年九月、吉本興業に二十五万円で身売りされる。そのうえ昭和十八年一月十六日、芦辺劇場西隣の映画館・大橋座から出火、付近の興行街をひとためにし、通天閣も「地上百尺までまっ赤に焼かれ、鎮火後一時間余、十数本のホースで漸く冷却」（大阪朝日新聞）するありさま。

「これではあぶない」といつていたところへ、供出のアラシが通天閣にも及び「お国のために」翌二月、解体され三百トのクズ鉄に変わりはてた。「あんなどえらいもんをツブすようでは、日本ももうアカン」——地元の人たちはこう思ったそう。大阪市の中央部に位置する通天閣は、いわば大阪のヘソ。それも出ベンだといわれていたが、上井さんも「あるべきところがない、妙なさびしさ。大げさにいうなら「異郷」にまよい込んだような、たよりなさを味わわれました」という。

「ところが残念なことに、あの通天閣は「お国のために」役立たなかったそうですよ。どこかはつきりしませんが、終戦当時、赤サビた残がいをさらしていたそうです」——通天閣観光会社の宮原実総務部次長の話である。

以来、新世界は「画竜点睛」を欠いていたが、さる三十一年十月、二代目が初代より北へ約二十メートルにそびえ立った。地元の人たちがお金を出し合って通天閣観光会社を設立、奥村組の施工で、十三年ぶり、三億四千円建て再建したのだ。高さは百三層で初代をしのぎ、世界初という円形エレベーターつき。翌年七月、初代が灯火管制で消灯して以来十五年ぶりに、広告ネオンが夜空を色どる。

現在千二百人の入場者を記録しているが、「これも通天閣を「襲名」したおかげです」と宮原さんは市民の郷愁をたくみにとらえた商魂をちょっぴりのぞかせる。最近ではスモッグで、展望台からの見晴らしも悪くなったが、逆手をとってスモッグ観測装置をとりつけ、公害追放に一役買っているところなど戦後派の二代目にふさわしい。

ところで上井さんは、初代・通天閣にのほらずじまだったという。「むかしかたぎの母が、高い所にのほること、写真をとることをきらって、許さなかったからです」。二代目には開業間もなく、一度のほったが「これが子どものころだったら……」と思いましたがね。でも、一度ものほらなかつたこ

とで、かえって通天閣のイメージが美化されていたといえるかもしれません。いまの通天閣のメカニク的な美しさにくらべ、むかしのはいかにもヤボったかった。けれど、わたしはあのヤボったさが、たまらなく好きだ」。